

愛知県特定鳥獣保護管理検討会 議事録

日時：平成 28 年 10 月 31 日(月)午後 2 時～

場所：愛知県自治センター 4 階 第 3 会議室

(1) 次期第二種特定鳥獣管理計画（平成 29 年度～平成 33 年度）の策定について

(委員)

資料 2 でカモシカは「気候変動、競争者や天敵の出現、病気の発生、植生の改変等に脆弱である」とあるが、必ずしもそうではない。また、カモシカの生息域は、競争者であるシカの影響で、密度が低くなるとともに周辺に広がっている。カモシカの保全上、シカの動向や錯誤捕獲時の対応についても注意する必要がある。

また、捕獲の目標を達成したとあるが、それは究極の目標ではなく、それにより個体数や被害を減らせたかが重要。総括では、密度指標や個体数推定値がどうなったかも含めてきちっと書くべきである。

ニホンザルに関しては、捕獲は目標数ではなく、群れをどう扱うかを考える必要があり、個体群のコントロールの考え方等を整理し、基本的な考え方を示していく必要がある。

(委員)

サルでは、被害を生じさせる群れがわかっているのであれば、その群れをもっと叩くことが必要。イノシシでは、根絶エリアを設けるとあるが、どのようにやるか、書くかどうかは別として必ず手順があると思う。サルの場合も、これだけいるのなら早目に捕ってしまった方が効果的である。新しく確認された地域では、現場と相談してすすめることが大事。

(事務局)

表現については見直していきたい。目標については、新たな計画では目標数が何頭という表現はせず、加害個体を捕まえて、モニタリングの状況を踏まえて判断するという考え方である。特にサルについてはアンケート等現場の状況を確認しながら検討していく。

(委員)

具体的にどうするか、新たに被害が拡大し程度もひどいような場合、その群れは除去するなど、考え方を明確にしておく必要がある。

サルについて、重点管理エリアと管理エリアを設けるのは構わないが、現状は、群れの数も個体数も減っておらず、分布域の拡大も止まっていない。それをどう変えるかというのが一番重要なテーマであり、それを踏まえてもう一度組み立てる必要があると思う。

(委員)

被害がひどい現場を重点的に叩く等の対応が必要であり、被害を減らす、分布範囲の拡大を食い止めるためには、現場と相談しながら対応を示すべき。

(事務局)

重点的に対応すべき群れを特定するため、アンケートで情報を掴み、個別に確認しながら決めていきたい。

(委員)

どの獣に対しても捕獲の担い手育成や捕獲技術とあるが、もう少し具体的な分析と進め方を詰めた方がよい。捕獲技術も、新しいものも重要だが今ある技術を適正に効果的に使っているかが重要。免許を取るのと、実際に捕るのは全く別の話で、そういうきめ細かな対応が求められる。1 シーズン当たりの捕獲数がゼロという人が圧倒的に多く、そういう人が 3～4 頭捕れるようにすることも必要。また、若い人達に狩猟免許を取ってもらっても、実際にどれだけ管理捕獲に携わっているか、携われる体制になっているか、を具体的に分析し対策をとらないと、ベテランの猟師がいなくなる。

(事務局)

免許取得者に対し技術取得のための研修を来年以降に実施予定である。また、若い人を確保するため、昨年度から大学、高校で狩猟の魅力や安全性の講座をやっている。

最近免許を取った人が、どの程度捕獲しているのかは分析しておらず、やっていきたい。

(委員)

どれだけの人に、どのような形で管理計画に加わってもらわなければいけないか、或い

はその可能性がどこにあるか、多面的に分析する必要がある。これは行政に期待することである。

(委員)

県職員の人材育成も必要。県職員は2年程で異動してしまうため、蓄積がされない。担当者が長期間固定されたり、研究機関に情報が蓄積されている自治体は比較的うまくいっている。

(委員/座長)

環境部ではないが、農業総合試験場と森林・林業技術センターでは一定程度の情報が蓄積されていると思う。環境部でも専任の技術者がいるとよい。

(森林・林業技術センター)

人事面を変えるのは困難なところもあるが、試験場等が中核となり、専門的な知識の集積場所になっていけるとよいと思う。

(農業総合試験場)

農業改良普及センターに専任の普及指導員が配置されて以降は、本格的に業務に携われるようになったが、まだ日が浅く、今後の人材も頭を悩ませている。

(委員)

15年が経過し、どこの県でもだいぶきっちりした計画を書けるようになってきている。今回の計画案もよく書けていると思う。

具体的な手法としては、鳥獣管理のための運動をするとよい。被害を少なくするために人が集まる運動体を作って進めなければ、成果は出せない。

今までの反省を踏まえていかなければ、この先なかなか進めない気がする。

(委員)

各計画に、地域に根ざした取組の充実とあるが、これをもっと押し進めていくとよい。現場が機能するためにも、この取組の充実を具体的に書くのが大事。

また、評価について、全体としてどう評価するか具体的に書いておくべき。次の問題点も分かりやすくなる。

(事務局)

シカの評価は、ベイズ法やメッシュで評価しようと考えているが、もう少し具体的に書くよう修正したい。

(委員)

各取組に対応した記述にすれば、どの部分が問題か分かる。

(事務局)

どういうデータを使って、どう評価をするか、もう少し詳しく書く。

(委員)

資料2で、生息環境管理を徹底するため普及指導員による指導を行うとあるが、うまく流れているか。また、同じような質問になるが、集落単位のマップ作りを市町村が促すとあるが、計画にどのように生きてきているのか。実際に資料2に書いてあるところまでやるのか、最終的には計画に書かれていることが全てなのか。

(事務局)

生息管理の徹底のため指導を行うとあるが、シカの場合は人材育成・確保体制の中で農業普及指導員に対する被害防除対策等とあり、この「等」で読むしかないので分かりにくい。

(委員)

環境管理として耕作放棄地を減らすというのを誰の責任でやるのかという話になる。

資料2では農業普及指導員と書いてあるが、やはり最後は土地管理者や地域の運動でないと無理だと思う。先程のメッシュも同じで、集落ごとに被害状況を確認しないことには、市町村から県へと情報が伝わることは無理だろう。

(事務局)

シカの場合、農業被害調査において5kmメッシュで増減を把握するため、市町村が何千というアンケートを行い、被害額を求めるのに併せて農業被害を把握している。

(委員)

各市町村により方法は異なっており、県からの依頼への迅速な対応も難しい。ただ、どのようなポイントで被害があるかは、是非とも地域の取組で知っていただきたく、このような表現となっている。耕作放棄地への対応は地権者等に依頼することになるが、それぞれの事情で進まないことが考えられ、このような表現となっている。ご意見を伺いながら考えていきたい。

(委員/座長)

具体的に組織名も出ているが、計画を充実させるためにも、農協や市町村、農業普及指導員と、県（環境部）との情報交換をしっかりと行うようにすべきである。

(事務局)

今後の検討会のスケジュールとしては、1月にパブリックコメントを実施する。その後に本検討会の3回目を実施する予定である。その内容をもって環境審議会で答申をいただく予定である。

(2) 第二種特定鳥獣管理計画に基づく平成28年度市町村実施計画（カモシカ）について
事務局より資料に基づき説明

(委員/座長)

これは次期計画前の最後の計画案になる。特に意見がないので、この内容で進めるということになる。

(3) その他

(事務局)

参考資料として鳥獣の捕獲分布図を色分けして示した。

また、ツキノワグマについて、堅果類の豊凶調査の結果により出没予測をしている。今年度は概ね並作ということで、人間の生活圏に出没する頻度が高まる可能性は低いとして、公表を行っている。今年度はこれまでに5件の目撃情報があり、昨年と比べて出没頻度は低くなっている。